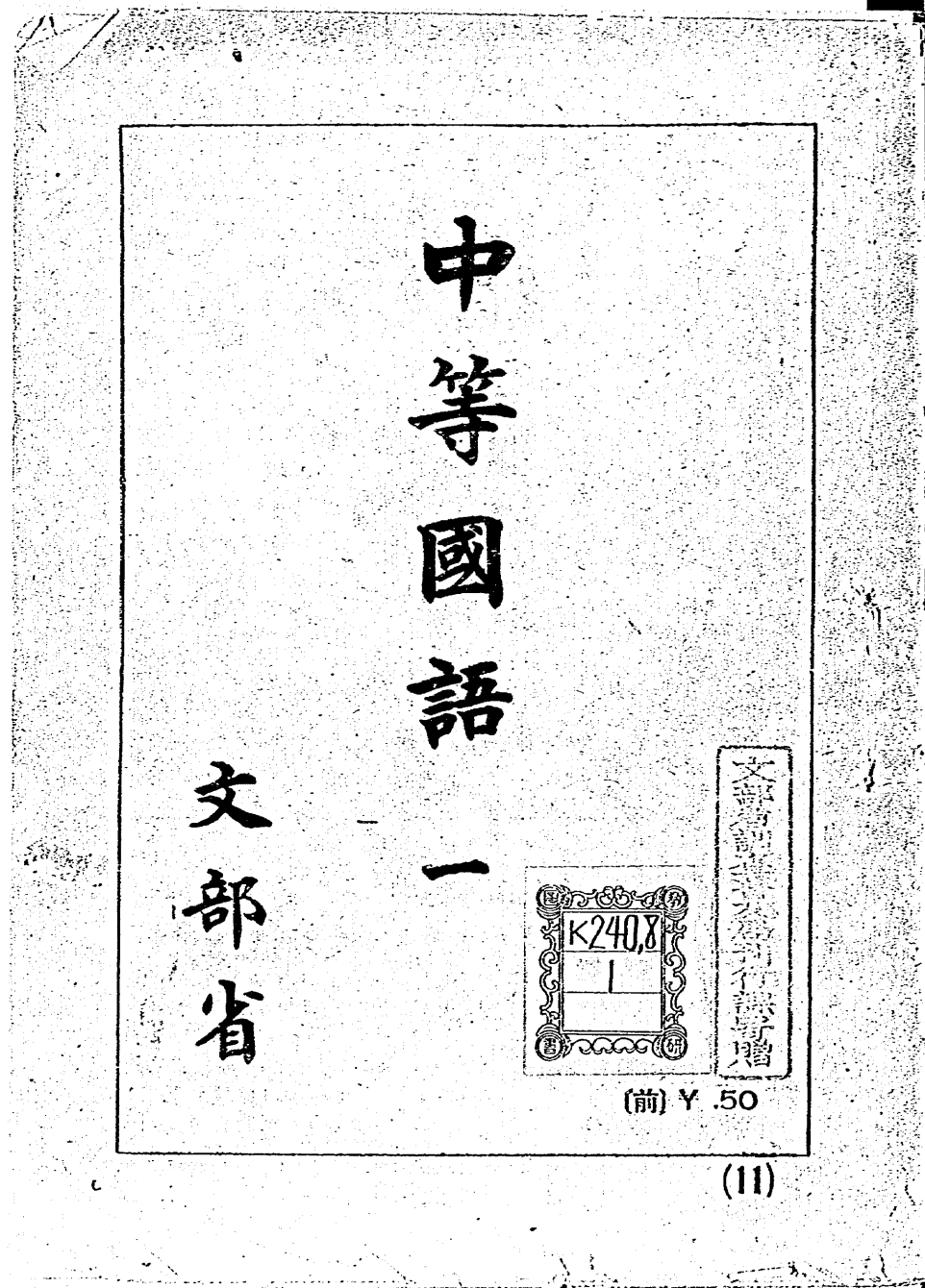




中等國語一

文部省



文部省図書
贈

(前) ¥.50

(11)

K240.8

1

目録

國文篇

一 富士の高嶺	一
二 親心	一
三 蘆蒲の節供	四
四 柿の花	五
五 涼み臺	五
六 秋から春へ	十四

昭和21年3月13日 印刷 同日發刻印刷
昭和21年3月17日 發行 同日發刻發行
〔昭和21年3月17日 文部省検査済〕

著作權所有 著者 登載者 文部省
大日本印刷株式會社
中等學校教科書株式會社
代表者 越井 貞 雄
〒100 東京市千代田区千代田一丁目十二番地
印刷者 大日本印刷株式會社
代表者 佐久間 長吉郎

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Mar. 13, 1946)

國文篇



富士の高嶺 萬葉集

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き
駿河なる 富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見
れば 渡る日の 影もかくろひ 照る月の 光
も見えず 白雲も い行きはかり 時じくぞ
雪は降りける 語りつき 言ひつき行かむ
富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高
嶺に雪は降りける

二 親心 雲萍雜誌

約束の松

名和又太郎長年は、その父嚴にして教訓の屈きたる

國文篇

人なり。

或る時、牛をひきたる童の、唄など歌ひて通りけれ
ば、長年はあと追ひ行きて、童に呼びかけ「われをそ
の牛に乗せて、川ばたまで行けかし。」と言ふに、童う
けがひ「御身を乗せて行くべきが、賃には何をか賜は
る。」と言へば、長年わが家を顧みて、門に生ひたる松
を指さし「いづれの樹なりとも、その方が望みに任す
べし。」とくく「やれ。」と言ふに、童喜びて、長年を川
ばたまで乗せ行きたり。

その後、三とせが程を経て、一人の男、童を作なひ
長年が家に來たり、長年が父に向かひ、三年以前の約
束を物語る。長年をさな心の戯れなれども、かの童は
これをまことと心得、牛に乗せたる賃をはたり、いか
に言ひ解きても肯んぜず。いかゞはせんと言へば、長
年が父、これを聞ふより「さもありぬべし。約束なせ
しにたがひなくば、切らせて遣すべし。」とて、童に望
ませ、門前なる大樹の松を柵に命じて切らせ、牛飼ひ
にとらせけり。

里人は、これを言ひ傳へ「名和が約束の松」と呼び

て、今に話し傳へたり。

詩歌の道

予はいとけなき頃より詩歌の道を好み、たま／＼作文などせし折から、稿成りて父に見するに、一つとしてほめられたることなく、唯「無益の事なり。」とて座右に投げ捨ておかれ、他の者のは見てほめられければ、さりとてはいかゞとのみ思ひ過しぬ。

のち、妻に迎へたる女の、物縫ふこと人にすぐれ、小袖など一日に一重ねづつ縫ひて、餘事までも事か、ねば、物縫ふ職人も驚くばかりなりけり。予、或る時、妻の物縫ふをひたぶるに愛で賞しけるに、妻の、三歳にして母におくれ、繼母に育てられしが、いと厳しく、五、六歳より水仕のわざをつとめ、七歳より手習ひ・物読み・裁縫縫ひを教へられ、實の子ならねば教訓足らずと、末に至りてそしられんはくちをし。」とて、羽根つく遊びだにえせで、唯、物縫ふことなどのみに暇なかりければ、折からは烈しき母よと思ひしかども、今となりては、物縫ふわざを人にほめられはべるは、

偏に繼母のなまけ薄からざりし慈愛なりと言へるを聞きて、予がいとけなき頃、作文をほめられざりしことの、いとありがたきを思ひ合はせぬ。

一人の弟子

江戸下谷高岸寺といふに、いつの頃にか、弟子の僧二人ありけるが、一人は身持ち律義にして、常々寺のためともなるべき事のみに心を盡くせど、一人は成行をも保たで、大酒を好み、いさかひなどして、よろづ私多かりしが、或る時、什物を取り出して賣らんとするを、一人の僧見て諫めけれども、聞き入れざりければ、この由を住持に告げ、「かの僧、追ひ出し給はずば、寺のためにもなるべからず。」と言ふに、住持は、「一先づ諭しみるべし。」とて、厳しく戒めたるまゝにて捨て置きぬ。

又或る時、佛具を取り出して賣りたるを聞きて、一人の僧、また住持が許に行きて、「惡僧、このたびは佛具を盗み出して賣りたり。われら諫めたりとて、更に用ふところもなく、住持も捨て置き給へば、是非に及ばず。われは、行く／＼禍の寺に及びて、身にもか

からんことを恐れ思へり。もし、かれを追ひ出し給はずば、われに暇を賜はるべし。」と言ふに、住持は涙を浮かべ、「さあらば、願ひのまゝにその方に暇を遣すべし。惡僧は今しばしわが傍らに置きて、おひ／＼諭すべし。」と言ふ。この僧、大いに住持を恨み、「われら暇を乞はば、惡僧を追ひ出し給はんと思ひしに、それを却つて罪なきわれらに暇賜はること、近頃依怙の心にあらずや。」と言へば、住持は答へて、「さにあらず。御身は今わが寺を出でたりとも、いづこへ行きてても、はや僧一人の勤めはなるものなり。惡僧は、今わが傍らを離れなば、忽ち捕らはれて罪人とならんものはかりがたし。さすれば、わが徳もすたれ、一人の弟子を失ふなり。故に、今しばしは傍らに置きて、かれが命をも延し、且つは厳しく教誡をもせば、善心に立ちかへることもあるべし。それを樂しみに、わが傍らをはなつことをせざるなり。」と言へば、惡僧もこの由を聞きて、師の高恩に感じ、やがて善心にかへりしとぞ。

予が閑窓のもとに、こつ／＼と聞ゆる音、ひねもす止まず。いかなる物の響きにやと、窓押してこれを窺ふに、老いさらばひし翁の、眼鏡をかけて、鏡の上に石臼の目を切りぬたり。

予、翁に問ふ、「石臼の目を切ること、その數、日々幾ばくぞ。」翁答へて、「切る日もあり、切らざる日もあり。」と言ふ。また問ふ、「老翁齡幾ばくぞや。」答へて言ふ、「今年七十一なり。」と。また問ふ、「子孫ありや。」答へて言ふ、「娘あり。早く嫁を迎へて、孫三人あり。」と。予曰く、「既に娘あり、婿あらば、老翁かゝるわざはせずともありなん。」と。翁の言ふ、「家に六人のすぎはひするに、婿一人の働きにして、他にたすくる輩なし。われ臼の目を切りたりとも、活計を補ふべきの資力に足らずといへども、欠伸のみに徒らに光陰を送らんよりは、せめて、鼻紙の料をもたすけばやと、かゝるあふなきわざをもしつるなり。」と笑ひぬ。人の親の子を思ふ恵み、たかきもいやしきも異なることなき、いとありがたきものと思ひぬ。

石臼の目

三 菖蒲の節供

一年に二度、幼い者のために節供の祝ひがあるのはうれしい。女の子のために三月の桃の節供、男の子のために五月の菖蒲の節供があるのはうれしい。

あの三月の節供に取り出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節供を祝ふためにあるものは、鍾馗と鬼と金時と桃太郎などの行列だ。

五月の空に高くひるがへる鯉轡は、子供の國をそこに打ち建てたかのやうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこちの屋根の上に鯉轡を望むのは楽しい。うろこを揃いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩。動きを喜ぶ子供の心を樂しませるやうなあの飛揚、大人の心をも子供の心に返すものば、あのはた〜と風に鳴る鯉轡の音だ。五月の節供を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒に聳く菖蒲までが、お伽の國の情調を誘ふのも懐かしい。

五月の節供を迎へる頃は、何といつても季節の感じ

が深い。桃・櫻は過ぎ去り、椿や木蓮にもおそく、山吹や藤や満天星などの花の香氣を放つ五月の初めは、一年のうちの最も楽しい季節の一つだ。遠い山々へはまだ雪の来る日があつて、雨でも降れば袷では寒いこともあるが、私たちの周囲は、もはや若葉の世界だ。

このよい時候に、楽しい菖蒲の節供がやつて来る。

桃の花が女の子にふさはしいやうに、菖蒲は男の子にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形もよい。爽かで、みづ〜しい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、やさしい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯があつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私たちの身をも心をも温めてくれるのもうれしい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中をかき分けて、湯槽にひたるのも楽しみだし、あの葉が私たちの肌へべつたりとついた時の心持も悪くない。

粽のかをりは幼い日のかをりである。粽ばかりは、ひなびた所で作られるものほどよい。あの細長い粽の葉の巻きつけてあるのを解いて、青い色に蒸されたかをりをかいだ子供の頃の心持は、今だに忘れられない。

粽のほかに柏餅、赤の御飯などと数へて来ると、五月の節供を祝ふもので、何がなしに懐かしい思ひを誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣もする。

この節供を祝ふために、私の家の近所にも大きな轡竿が立つた。矢の形をした風車を竿の先につけたもので、青葉に埋められた谷底のやうな私の家の前あたりからは、高く見上げるやうな位置にある。きのふの夕方、私はそこを歩き廻りに行つて、坂の下まで歸つて来ると、隣家の男の子が、おばあさんの背中につきまみながら、じつと岡の上の風車の動くのを見つめてゐるのにあつた。私はその男の子の顔を見守りながら、しばしそこに立つてゐた。漸く数へ歳の二つにしかかならないやうな幼い子供にも、そんなに眼にうつるものがあるといふことは、或る深い印象を私に與へた。

(島崎春樹ノ文ニ據ル)

四 柿の花

正岡子規

柿の花土塀の上にこぼれけり

國文

満山の若葉にうつる朝日かな
片隅にあやめ花咲く門田かな
藻の花や水ゆるやかに手長殿
雲の峯水なき川を渡りけり
苔清水馬の口籠をはづしけり
椎の木を伐り倒しけり秋の空
鳴なくや一番高い木のさきに
稻妻や一本杉の右左
赤とんぼ筑波に雲もなかりけり
烏ないて赤き木の實をこぼしけり
さら〜と竹に音あり夜の雪
崖急に梅こと〜と斜めなり
菜の花の四角に咲きぬ麦の中

五 涼み臺

新 星

毎年夏になつて、そろ〜と夕方の風がこひしい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持ち出される。これが持ち出される日は、私の單調な一

年中の生活に、一つの著しい區切りをつける重要な日になつてゐる。もう、明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふことが、誰かの口から言ひ出される。しかし、その翌日が雨であつたり、さうでなくてもいろいの事にまぎれたりして、つい一日、二日と延びる。

そのうちに、いよ／＼今日はいふことになつて、朝のうちに物置の屋根裏から臺が取りおろされ、一年中のほこりや齷が濡れ雑巾でていねいに拭ひ清められ、それから裏庭の日かげで乾かされる。さうして、いよ／＼夕方になつて中庭に持ち出されると、はじめて、私の家にほんたうの夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺のほかに、折り疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明かるといふうちに、は、繩とびをする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいてゐるものもある。明朝咲く朝顔のつぼみを数へて報告するものもある。幼い女兒二人は、縁側へい／＼なお花を並べて、花屋さんごつこをすることもある。暗くなると、火花をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんに「お國の話」をさせたりしてゐる。

る。幼い子供らには、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の妖精の國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流れにあひるがたくさん遊んでゐて、夕方になると上流の方の飼主が、小舟で連れに來るといふやうな、何でも無い話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを幼い頭の中に描かせるとみえる。それで、いつも「お國の話」をねだつては、おしまひに「私もお國へ行きたいなあ。」と一人が言ふと、もう一人が同じ言葉を探り返すのである。子供らの祖父の若かつた頃の昔話もしば／＼出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠い／＼昔の出来事であつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして、祖父を見たことのない、或はおぼろげにしか覚えてゐない子供らには、會津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないであらう。さうしてそれだけに、却つて祖父に對する懐かしみは淨化され、純化さ

れて、子供らの頭の中の神殿に納められるのであらうと思はれる。

今年の夏、涼み臺が持ち出されて間もなく、長男が、宵のうちに南方の空に輝く大きな赤みがかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見ると、それは黃道に近い所にあるし、ちら／＼また／＼をしないから、いづれ遊星には違ひないと思つた。さうして、近刊の天文の雑誌を調べてみると、それが火星だといふことがわかつた。星座圖を出して來てあたつてみると、それは處女宮の一等星スピカの少し東にあるといふことがわかつた。それで、その圖の上に鉛筆で現在の位置を記し、そのわきへ日附を書いておいて、この夏中のこの遊星の軌道を圖の上で追跡してみようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して目立つた星宿を見比べてゐた。その頃は、まだ、織女や牽牛は宵のうちは、かなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに、氷のやうな光を投げてゐた。空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流

星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が、夜中、空を見張つてゐる話をして、それから新星の發見に關する話をして聞かせた。主だつた星座を暗記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふことも話した。

一秒間に二十九萬九千キロを走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、ばくだいな距離を隔てて散布された天體の二つが、偶然接近して新星の發現となる機會は、例へば釋迦の引いた譬喩の、盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほど小さなうであるが、天體の數のばくだいなために、新星の出現はそれほど珍しいものではない。たゞ光度の著しく強いのが割合に稀である。

こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふことであつた。わが家の先祖の誰かが、どこかでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠い／＼宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世にこの世界に届くといふことである。

八月になつてから、雨天や曇天が暫く續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日もたつた。或る朝、新聞を見てゐると、今年卒業した理學士某氏が流星の観測中に、白鳥星座に新星を発見したといふ記事が出てゐた。その日の夕方涼み臺へ出て、子供と共にその新星を探したら、直ぐわかつた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐることは、織女・牽牛が宵のうちに眞上に來てゐるのでも知られた。さうして、新星はかなり天頂に近く、白鳥星座の一番大きな二等星と光を争ふほどに輝きまたゝいてゐるのであつた。「暫くなまけたので、新星の発見をしそこなつたね。」と言つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして、さうして、さもゝしろさうに笑つてゐた。私はじょうだんのつもりで言つたのだが、子供には私の意味がよくわかるまいと思つた。それで、誤解をしないために、次のやうな説明をしておかなければならなかつた。新星の出現する機會は、極めて少い。われ／＼素人が星座の點検をする機會も、また甚だ少い。随つて、先づ新星が現れて、それからわれ／＼がそれを発見す

るといふ確率は、二つの小さな分數の相乗積であるから、つまりごく小さい物のまた小さい分數に過ぎない。これに反して、毎晩缺かさず空の見張りをしてゐる専門家に取つては、「偶然」は寧ろ主に星の出現といふことのみにあつて、われ／＼の場合のやうに、星と人に關する二重の「偶然」ではない。強ひていへば、天氣の晴れ曇りや日常の支障といふやうな、偶然の出來事のために、一日早く見つけるかどうかといふことが問題になるだけであらう。

そのうちに、また曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がする。どうかすると、夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。随つて、星のことももう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事はこれから始るので、學者たちは毎晩曇つた空を眺めては、晴れ間を待ち明かしてゐることであらう。

線香花火

夏の夜に、小庭の縁臺で子供らのもてあそぶ線香花

火には、大人の自分も強い誘惑を感ずる。これによつて、自分の子供の時代の夢がよみがへつて來る。今はこの世にない親しかつた人々の記憶が喚び返される。初め先端に點火されて、たゞかすかにくすぶつてゐる間の沈黙が、これを見守る人々の心を、まさに來たるべき現象の期待によつて緊張させるに、ちやうど適當な時間だけ繼續する。次には火藥の燃焼が始つて、小さな焰が牡丹の花燄のやうに放出され、その反動で全體は振子のやうに搖れ動く。同時に、灼熱された熔融塊の球がだん／＼に成長して行く。焰が止んで、次の火花の段階に移るまでの短い休止期が、また名狀しがたい心持を與へるものである。火の球はかすかな、物の煮えたぎるやうな音をたてながら、こまかく振動してゐる。それは、今にもほとばしり出ようとする勢力が、内部に渦巻いてゐることを感ぜさせる。突然、火花の放出が始る。眼にも止らぬ速度で發射される微細な火彈が、眼に見えぬ空中の何物かに衝突して碎けてもするやうに、無數の光の矢束となつて放散する。その中の一片は、また更に碎けて、第二の松葉、第三、

第四の松葉を展開する。この火花の時間的並びに空間的分布が、あれよりもつとまばらであつても、或は密であつてもいけないであらう。實に適當な步調と配置で、しかも十分な變化をもつて火花の音樂が進行する。この音樂の速度は、だん／＼に早くなり、密度は増加し、同時に一つ／＼の火花は短くなり、火の矢の先端は力弱く垂れ曲る。もはや爆裂するだけの勢力のない火彈が、空氣の抵抗のためにその速度を失つて、重力のために拋物線を描いて垂れ落ちるのである。私の母は、この最後の段階を「散り菊」と名づけてゐた。ほんたうに、單瓣の菊のしをれかゝつたやうな形である。「ちりぎく、ちりぎく、ちりぎく。」かう言つてはやして聞かせた母の聲を思ひ出すと、自分の故郷に於ける幼時の追憶が、鮮明に喚び返されるのである。あらゆる火花の勢力を吐き盡した球は、もろく力なくぼとりと落ちる。さうして、この火花の音樂の一曲が終るのである。あとに残されるものは、淡くはかない夏の宵闇である。

實際、この線香花火一本の燃え方には「序破急」が

あり、「起承轉結」があり、詩があり、音楽がある。ところが、近代になつてはやりだした電気火花とか何とか花火とか稱するものはどうであらう。なるほど、アルミニウムだか、マグネシウムだかの閃光は、光度に於いて大きく、ストロンチウムだか、リチウムだかの焰の色は美しいかも知れないが、初めからおしまひまで、たゞぼう／＼と無作法に燃えるばかりで、拍子もなければ律動もない。それでまた、あの燃え終りのきかなさ、曲のなさはどうであらう。

線香花火の灼熱した球の中から火花が飛び出し、それがまた、二段、三段に破裂するあの現象が、いかなる作用によるものであるかといふことは、興味ある物理學上並びに化學上の問題であつて、もし詳しくこれを研究すれば、その結果は、自然にこれらの科學の最も重要な基礎問題に觸れて、その解釋は何らかの有益な貢獻となり得る見込みがかなり多くあるだらうと考へられる。それで、私は十餘年前から、多くの人にこれらの研究を勧誘して來た。特に、十分な研究設備をもたない人で、何かしら獨創的な仕事をしてみたいとい

いふやうな人には、いつでもこの線香花火の問題を提供した。しかし、今日まで、まだ誰もこの仕事に着手したといふ報告に接しない。結局、自分の手もとでやるほかはないと思つて、二年ばかり前に少しばかり手を着け始めてみた。ほんの少しやつてみただけで得られた僅かな結果でも、それは甚だ不思議なものである。少くも、これが將來一つの重要な研究題目になり得るであらうといふことを認めさせるには十分であつた。

このおもしろく有益な問題が、從來、誰にも手を着けられずに放棄されてゐる理由が、自分にはわかりかねる。恐らく、「文獻中に見當らない。」即ち誰もまだ手を着けなかつたといふこと以外に、理由は見當らないやうに思はれる。しかし、人が顧みなかつたといふことは、この問題のつまらないといふことには決してならない。

藤の實

夕方(昭和七年十二月十三日)、外から歸つて居間の机の前へ坐ると同時に、びしりといふ音がして、何か

座右の障子にぶつかつたものがある。子供がいたづらに小石でも投げたのかと思つたが、さうではなくて、それは庭の藤棚の藤豆がはねて、その實の一つが飛んで來たのであつた。家の者の話によると、今日の午後一時過ぎから四時過ぎ頃までの間にひんばんにはじけ、それが庭の藤も臺所の前のも、兩方申し合はせたやうに盛んにはじけたといふことであつた。臺所の方のは、二メートルぐらゐを隔てた障子のガラスに衝突する音がなか／＼烈しくて、今にもガラスが破れるかと思つたさうである。自分の歸宅早々経験したものはその日の爆發の最後のものではあつたらしい。

この日に限つて、かうまで目立つてたくさんに、一せいははじけたといふのは、數日來の晴天でいゝ加減乾燥してゐたのが、この日更に特別な好晴で、湿度が低下したために、多數の實がほゞ一様な極限の乾燥度に達したためであらうと思はれた。

それにしても、これほど猛烈な勢で實を飛ばせるといふのは、驚くべきことである。書齋の軒の藤棚から居室の障子までは、最短距離にしても十メートルはあ

る。それで、地上三メートルの高さから水平に發射されたとして、十メートルの距離に於いて、地上一メートルの點で障子に衝突したとすれば、空氣の抵抗を除外しても、少くも毎秒十メートル以上の初速を以つて發射されたとなれば、勘定が合はない。あの一見枯死してゐるやうな豆のさやの中に、それほどの大きな原動力が潜んでゐようとは、ちよつと豫想しないことであつた。この一夕の偶然的觀察が動機となつて、だん／＼この藤豆のはじける機構を研究してみると、實に驚くべき事實が續々と發見されるのである。

それはとにかく、このやうに、植物界の現象にも、やはり一種の「潮時」とでもいつたやうなもののあることは、これまでもたび／＼氣づいたことであつた。例へば、春季に庭前の椿の花の落ちるのでも、或る夜のうちに、風もないのにたくさん一時に落ちることもあれば、又、風があつても、ちよつとも落ちない晩もある。

もう一つ、よく似た現象としては、銀杏の葉の落ち方が注意される。自分の關係してゐる或る研究所の居室の外に、この樹の大木の梢が見えるが、これが一様

に黄葉して、それに晴天の強い日光が降り注ぐと、室内までが黄色に輝き渡るくらゐである。秋が深くなると、その黄葉がいつの間にか落ちて、梢が次第に寂しくなつて行くのであるが、しかし、その散り方がどうであるかに就いては、去年の秋まで別に注意もしないでゐた。ところが、去年の或る日の午後、何の氣なしにこの樹の梢を眺めてゐた時、殆ど突然に、あたかも一度に切つて散らしたやうに、たくさんの葉が落ち始めた。驚いて見てゐると、それから二十メートル餘を隔てた小さな銀杏も同じやうに落葉し始めた。まるで申し合はせたやうに、濃密な黄金色の雪を降らせるのである。不思議なことには、殆ど風といふほどの風もない。といふのは、落ちる葉の流れが殆ど垂直に近く落下して、樹枝の間をくぐりくぐり、脚下に落ちかゝつてゐることで明白であつた。何だか、少しもの凄いやうな氣持がした。何かしら目に見えぬ怪物が樹々を揺すぶりでもしてゐるか、或はどこかでスイッチを切つて、電磁石から、鐵製の黄葉を一せいに落下させたとしてもいつたやうな感じがするのであつた。ところがま

た、今年の十一月二十六日の午後、京都帝國大學の或る教授と連れだつて、上野の清水堂近くを歩いてゐたら、堂のわきにある、あの大木の銀杏が、突然に、一せいの落葉を始めて、約一分ぐらゐの間、たくさんの葉を振り落したのちに、再び靜穩に復した。その時も、殆ど風らしい風はなく、落葉は少しばかり横になびくくらゐであつた。同教授も始めてこの現象を見たと言つて、おもしろがりもし、又、喜びもしたことであつた。

この現象の生物學的機構に就いては、われ／＼物理學の學徒には想像もつかない。しかし、葉といふ物質が、枝といふ物質から脱落する際には、ともかくも、一種の物理學的の現象が發現してゐることも確實である。この事はわれ／＼にいろ／＼の問題を暗示し、又いろ／＼の實驗的研究を示唆する。もしも、植物學者と物理學者と共同して研究することができたら、案外おもしろいことにならないとも限らないと思ふのである。

これとはまた全く縁もゆかりもない話であるが、先日、家の子供が階段から落ちてけがをした。それで、近所の醫師に來てもらつたら、ちやうど同じ日に、そ

の醫師の子供が、學校の歸りに道路で轉んで鼻がしらをすりびき、おまけに鼻血を出したといふことであつた。それから二、三日たつて、家の他の子供が手提をすり取られた。さうして、電車の停留場の安全地帯に立つてゐたら、通りかゝつた貨物自動車の荷物に引つ掛けられて、上着にかぎさきをこしらへた。その同じ日に、家の女中が電車の中へ大事な包を置き忘れて來た。これらは、現在の科學の立場からみれば、まるで問題にも何にもならない事で、全く偶然といつてしまふよりほかはない事である。しかし、これが偶然であるといへば、銀杏の落葉もやはり偶然であり、藤豆のはじけるのも偶然であるのかも知れない。又、これらが偶然でないとすれば、前記の人事も全くの偶然ではないかも知れないと思はれる。少くも、家に取り込み事のある場合に、家内の人々の精神状態が平常といくらか違ふことはあり得ることであらう。

年末から新年へかけて、新聞紙でよく名士の訃音（ふぐおん）がひんばんに報じられることがある。感冒（かんぼう）の流行してゐる時だと、それが簡単に説明されるやうな氣のするこ

ともある。しかし、さう簡単に説明されない場合もある。

四、五月頃、全國の各所で殆ど同時に山火事が突發することがある。一日のうちに、九州から奥羽へかけて十數箇所山火事の起ることは、決して珍しくない。かういふ場合は、大抵、顯著な不連續線が日本海から太平洋へ向かつて進行の途中に、本州島弧を通過する場合であることは、統計的研究の結果から明らかになつたことである。「日が悪い。」といふ漠然とした説明が、この場合にはりつばに科學的な言葉で置き換へられるのである。

人間がけがをしたり、遺失物をしたり、病氣が亢進（かうしん）したり、或は飛行機が墜ちたり、汽車が衝突したりする「惡日」も、現在の科學からみれば、單なる迷信であつても、未來のいつかの科學では、それがりつばに説明されることにならないとも限らない。少くも、さうはならないといふ證明も、今のところなか／＼むづかしいやうである。

大 秋 から 春 へ

大海の日の出

枕をうごかす隣に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。
時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水
明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過ぎにもやあらん、海上なほほの暗く、波
の音のみ高し。東の空を望めば、地平線に沿うてくす
ぶりたる褐色の横たはるあり。上りては濃き藍色の空
となり、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を掛く。
光さやかにして、さながら東瀛を鎮するに似たり。左
手に黒くさし出でたるは、犬吠岬なり。岬端の燈臺に
は回轉燈ありて、陸より海にかけ、頻りに白光の環を
描きぬ。

暫くするほどに、曉風冷々として青黒き海原を掃ひ
來たり、夜の衣は東より次第に剥けて、蒼白き曉の波
を踏みて、こなたへこなたへと近寄るさまも指點すべ
く、磯の黒きに波白く打ちかゝるさまも、漸く明らか
になり來たりぬ。目を上ぐれば、黄金の弓と見し月も

いつか白銀の弓と變り、くすぶりと見えし東の空も次
第に澄みたる黄色を帯びぬ。森々たる海原に立つ波の、
腹は黒うして背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上にさま
よへど、東の空既にまぶたを開きて、太平洋の夜は今
明けんとするなり。

既にして、曙光は花の開くが如く、圓波の廣まるが
如く、空に水に廣がり行きて、水いよ／＼白く、東の
空益々黄ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、果て
はありとも見えすなりぬ。この時、日の使とも覺しき
渡り鳥の一群、鳴きつれて海原をかすめて過ぐれば、
大瀛の波といふ波は悉く爪立ちて東の方を顧み、一種
待つあるのさゝめき——聲なきの聲四方に滿つ。

五分過ぎ——十分過ぎぬ。東の空、見る／＼金光さ
し來たり、忽然として猩紅の一點海端に浮かび出でぬ。
すはや日出でぬと思ふ間もなし。息をもつかせず、瞬
く間もなく、海神が手もてさゝぐるまゝに、水を出づ
る紅點は金線となり、黄金の腕となり、金蹄となり、
一搖して名残りなく水を離れつ。水を離るゝその時遠
く、萬斛の金たら／＼と昇る日より滴りて、萬里一瞬、

中 等 國 語 一

文 部 省

文部省圖書刊行部寄贈

(中) ¥1.20

(11)